



のうりん すいさん だいじん しょう
農林水産大臣賞

米作りを受け継いで

岐阜県高山市立丹生川中学校一年

加藤 大地

今年の春、祖父が他界しました。大切な家族がいなくなり、悲しい思いをしました。

我が家の米は祖父が主体となり作っていました。八年前からパーキンソン病を患い、米作りも思うようにいかななくなってきました。そのため、田植えから稲刈りにいたるまでこうするんだとかああするんだとか口で指導をしてくれました。

今年はその祖父が亡くなってから初めての米作りでした。もみの発芽までは、うまくいったのですが、もみまきをした時に生えた所と生えてない所が出てしまいました。祖母が一生懸命に追肥をしましたが、うまくいかず、結局苗を買うことになりました。

田植えの作業も順調とは言えませんでした。機械からうまく液体肥料がおりず、稲の成長が場所ごとに段違いになってしまいました。僕はそんな稲を毎日見ながら、その生長をとて心配していました。残された家族で追肥をしても、あまり変わりありません。四反近くある田んぼが、線を何本も引いたように段違いになっていました。

祖父が生きていたら、こんな時何と言ってくれるのだろう。しかし、もう指導を聞くことはできません。毎年、こうやって苦労を重ねて米作りをしてくれていたことに、少しずつ気づくことができきました。

家族の苦労が実り、八月初旬にとうとう穂が出始めました。今までは当たり前に見ていた風景もとてもありがたく見えました。

僕は、本当に米が大好きでよく食べます。野球のあとにはおなかがあくので夢中になって食べます。給食でもクラスで一番おかわりをしてい

る自信があります。特に好きな食べ方は米の味がよくわかる塩のおにぎりで。

そんな僕も家族の一員として稲刈りを手伝います。父がコンバインで稲を刈り、母と僕で米が入った袋をトラックにのせます。重労働で腰が痛くなりますが、何とか協力してやりきりました。苦労して収穫した米をライスセンターに預けた瞬間にほっとします。それは家族の思いが一粒一粒に詰まっているので大切に扱おうとする緊張感があるからなのです。あともう少しで今年の稲刈りが始まります。祖父が亡くなってから初めての稲刈りです。

「大雨や台風で稲が倒されなければいいのだが。」

と父も心配しています。それと同時に、

「今までじいちゃん、いろいろなやつてくれていたんだなあ。」

としみじみ言っていたのが印象的でした。

夏の日差しが厳しい中、真っ黒になりながら、田んぼを大切に守り抜いてきた祖父。今でもその姿が鮮明に浮かびます。今、こうして僕が思っているように祖父も家族のことを大切に思ってくれていたのだということとを米作りの中から、見出すことができました。米作りを大切にすることは家族を大切にすることだったのです。

今、祖父の米作りを父が受け継ぎました。それは単に田んぼを継ぐということだけではなく、家族を愛する心を受け継ぐということなのだと思えました。父の表情からその決意を確かに感じ取ることができました。いつか僕たちの代にも米作りが受け継がれます。その時、胸を張って米作りができるようにこの先、しっかりと父の姿を見て学んでいきたいと思えます。

あと少しで今年の収穫です。今年は今までよりも、もつともつと大切に味わって食べようと思います。

きつとそこで、家族を思う祖父の思い、祖父の味に出会えるはずなのだから。